ぱちんこ
言葉物語 ⑰

「パチプロ・スロプロ」

今回の言葉物語は「パチプロ（スロプロ）」という言葉をテーマにしたいと思います。

この言葉は、業界にとっては非常に馴染み深いはずの言葉ですが、意外とその実態深くまでは入り込みづらいものでもあります。

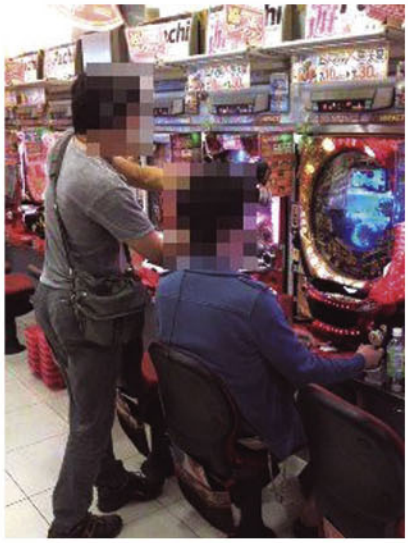
昔と変わってきた「質」

昔の遊技機のように、特定の技術により出玉を獲得できた場合においては「高度な遊技技術を持つ者」と言えましたが、現在においては「パチンコ・パチスロにて生計を立てている者」と言って良いかもしれません。それは、遊技技術による出玉性能の差が生まれることは現在では稀であり、知識・情報による蓄積量の差がプロと呼ばれる人達の技術の差につながる時代へ変化してきたためです。

そのため、グランドオープン級のイベント（この表現が適切かは今となっては疑問ですが）では、情報を共有するグループ同士が集まり「プログループ」となり、限られた景品額のパイをプロ同士が奪い合い、一般客が結果的に締め出されるような構図も出てきています。

このように、どこまでも通い勝負する立ち回りの人たちを「（オープン又はイベント）渡り」や「流し」と呼ぶこともあるようです。

また現在では、実戦漫画の原作やパチンコ・パチスロ系番組の出演などにより生計を賄う人も多く出てくるようになりました。それは現在多岐にわたるようになり、「この人誰？」といった人までが登場してくるような状況になっています。



業界去ったプロの言葉

ここで、私の親友に元パチプロがいますので簡単に紹介します。

彼は妻子持ちで子供は2人、激戦区の店舗を中心にしながら都内全域をカバーする。前日の午後9時から100店舗ほどWEBサイトやブログなどの情報を集め、午後10時以降から地元の状況確認。翌日6時には起床し夜間の更新情報を確認しつつ候補店舗の整理券抽選に行く支度をします。抽選にもれた場合は第二候補以下の店舗へ流れる。ボーダー以上（収支上プラスとなる）の台を確保できたと確信した場合は終日打ち倒しの毎日です。妻子持ちであるプレッシャーは非常に大きく、例えばグランドオープンの整理券確保の際に選ぶ機種は遊パチばかり。それでも浮沈は激しくバイトをしながらの生活を続けていました。

しかし最近、15年以上続けていたこの生活から引退しました。彼曰く「一人で何とかなった時代は終わった。アツいイベントではグループで島占拠するような容赦ないプロ連中も出てきたし、もう立ち回れない。一般のお客もえらい迷惑してるし、なぜ店があんなにイベントやりたがるのかいまだによく分からない」とつぶやき、業界を去って行きました。

イベントは誰のため

今年夏以降の稼動が厳しいという声は、一般の人の耳にも徐々に入ってきています。そしてそれはイベント等による射幸心の扇動ができなくなったからだという声が業界人から多く聞こえてきているのは事実です。

しかし、そのイベントで来場していた方は本当に自店のお客様だったのでしょうか。私がある企業で販促の責任者をしていた時代、例えばブログ媒体でも「お客様との距離を縮めユーザーの精神的な拠り所を作る」と決めた定義を今でも確実に守ってくれている役職者の店には、異動の際にも追いかけて通ってくれる程の絆を作り上げています。

パチプロと呼ばれる人たちにとっては環境は非常に苦しくなったわけで、多くの方の引退もあるでしょう。それを人口減少と考えずに「本来の姿に戻る」と捉え、再度ゼロから業界は再び歩み出すことが求められているのではないでしょうか。

（大和田敏男）

一人では苦しい時代に